

(ジャパントイムズ、2014年3月5日掲載)

わたしたちのポスト福島・獣時代

中山智香子

「半減期」は放射性物質を扱う際の基本的用語の一つである。たとえばプルトニウム 239 半減期が 24100 年であり、それは放射能が元のレベルの半分になるのにそれだけの時間を要することを意味している。プルトニウム 239 の放射能が人間にとって無害なレベルまで下がるには、はかり知れないほどの時間がかかる。デンマークの映画ディレクターのマイケル・マドセンは、2010 年に製作したドキュメンタリー映画の「Into Eternity (永遠に向けて)」(邦訳は『十万年後の安全』)というタイトルで、そのことを表現した。この映画はフィンランドにある放射性廃棄物の地下貯蔵庫に関するものである。

人間の平均寿命はだいたい 80 年ぐらいなので、たとえ千年後といえども長すぎて、そのとき世界がどんなふうになっているかを想像するのが難しい。

かつて、日本で広島やチェルノブイリなどに関する優れたテレビ番組を製作してきたある元ディレクターが、人間の記憶の半減期はずいぶんと短い、と比喩的に警告したことがあった。たしかにわたしたちは、世界的な規模で起こった破滅的事故のことさえ、短期間で忘れてしまうことが多く、かれの警告は核心を突いている。

そしてまたわたしたちは、自分の国で福島の破局を経験したにも関わらず、たった三年で、もうその記憶を風化させている人びともいる。もちろん三月十一日前後には、このコラムを含めて数多くのコラムやエッセイが書かれるだろうが、一年に一度その日を思い出すだけでは十分ではない。災厄は今も続いているのだ。

吉沢正巳さんは、三つの原子炉がメルトダウンを起こした東京電力福島第一原子力発電所から約 14 キロ離れた浪江町で、牧場の 300 頭以上の牛とともに暮らしている。発電所から放出された放射性物質で重度に汚染されたこの地区に居住することは違法であるとして、ここに家畜を生かして住み続けていると批判された。しかしかれの生活そのものが、法に対する抵抗なのである。

二年前、三月十一日一周年に福島で行われた県民集会の会場で、吉沢さんが参加者に向かって叫んでいるのをたまたま耳にした。かれは会場の入り口ゲート付近で、「わたしたちはまだ生きています。だけど生きていく意味がないんです！」と叫んでいた。

それが何を意味するのかは、かれが二〇一二年三月一日にブログに書いたエッセイ、「福島、そして浪江にチェルノブイリを抱いて」に記されている。「大混乱の中での…避難に次ぐ避難、以来双葉郡と浪江町の時間は止まったままだ。…町は分断され、住民の意思は分裂し、…コメ作りは意味がなくなってしまった。子どもたちはもう戻ってこないし、その親達も浪江には戻らない。幼稚園・保育園・小学校・中学校・高校などは意味がない。…病院、スーパー、商店だって意味は無く、…除染など果たして意味はあるのだろうか判らない。…何を希望と言えるのか」。

たしかに当時、将来に何らかの希望を見出すことは、きわめて難しかったに違いない。しかし吉沢さんはみずからの牧場を希望の牧場と名付けた。かれがいうには、被曝した家畜たちに経済的価値がないのはわかるが、だからといって家畜たちは「動く瓦礫」ではない。「動く瓦礫」とは農水省の役人たちが付けた酷い名前であり、役人たちは被曝した動物

たちを「殺処分」したいと考えている。

まったく、吉沢さんのいうとおりである。いのちは商品ではなく、被曝した動物たちの肉や乳を飲食できないからといって、またかれらを食べさせるのにエサ代がかかるからといって、それだけの理由で彼らが殺される必要はない。それをどうしても殺すように強要する法律とは、いったいどういう法律なのか。

吉沢さんの抵抗を見ていると、チェルノブイリの事故の後、その付近で消えていった村を撮影した映画監督、本橋成一さんのことを思い出す。本橋さんが撮影を始めたきっかけは、もともと住んでいた場所を離れようとしなかったある老人に出会ったことだった。老人は本橋さんに、「どこへ行けと言うんだ？人間が汚した土地だろう」と語ったという。この農夫もまた、売れなくなった牛とともに暮らしていたが、ひきとる牛の数は次第に増えて行った。この農夫の暮らしもまた、静かな抵抗であった。

もちろん、深刻な事故があった後にも避難してはいけなかった、避難してはいけないと主張したいのではまったくくない。危険から避難する権利は、生きとし生けるものの基本的な権利の一つとして保証されなければならない。また政府からの要請に応じて貴重な家畜たちを殺処分した農家は、ちゃんと補償を受けられるべきである。しかし同じく重要なのは、どこかの区域を政治的に恣意的な判断で「警戒区域」に指定したり解除したりするのは、住民たちの生活を破壊するということが、認識されることである。

吉沢さんの希望の牧場は、政治の道具ではない。牧場では、被曝した動物たちの疫学的ケーススタディーの素材を提供することができる。希望の牧場の獣医である伊東節郎さんは、吉沢さんや伊東さんとの協働に関心をもつ専門的研究所や研究者があれば、喜んで受け入れたいと話している。

ところで本橋さんは近年、食肉のための屠畜を描いた映画『ある精肉店のはなし』（瀧川あや監督）をプロデュースした。大阪で精肉店を営むその家族は、百年以上にもわたってずっと牛を飼育し屠畜し骨を抜き、その食肉を販売してきた。

しかし2012年に屠畜場が閉鎖されることになったため、映画は家族たちの最後の日々を追った。そこでわたしたちは、肉を購入して食べるに至るまでのすべてのプロセスを、映画で見ることになる。本橋さんがなぜこの映画をプロデュースしたのか、わかる気がする。たいていの人びとにとって、みずからの栄養を得るために、どこかで屠畜が行われることは避けがたいものなのである。

そしてまた、本橋さんのこの視点を得ると、吉沢さんの活動の意味をよりよく理解することができるようになる。みずからの牛たちをわたしたちの栄養のために提供するという吉沢さんの暮らしは、福島の破局によって破壊されてしまった。そのことは、一見間接的ではあるが、わたしたちの食生活に関わりをもつのである。食肉ばかりでなく、野菜でも米でも魚でも、その他にもこの国のさまざまな食物について、提供するシステムが今も災厄の被害を受け続けている。わたしたちはこうした視点から福島を記憶しておかなければならない。